

## 19. 特発性ヘモクロマトーシスの1例

土屋 慎, 田代 淳, 石井良実  
 藍 壽司, 畦元亮作  
 (千葉県循環器病センター)  
 李 光浩, 宮崎 彰 (同・循環器科)

症例48歳女性。主訴コントロール不良な糖尿病, 皮膚中等度暗褐色, 心不全。これらを一元的に説明する疾患としてヘモクロマトーシスを疑う。血清鉄, フェリチン高値, 腹部CTにて肝のCT値が他臓器に比べて明らかに高く, 肝生検施行にて肝実質細胞内にヘモジデリン沈着を認めヘモクロマトーシスを診断し, 瀉血療法にてフェリチン値減少, transaminaseは若干の低下をしめしている。

## 20. 当院における肝癌に対するRFA治療経験

谷嶋隆之, 夏木 豊, 小林茂雄  
 谷嶋つね (山王病院)

当院での肝癌に対するラジオ波焼灼療法(RFA)治療成績について報告する。21カ月間に31症例43病変に治療を施行した。RFAはLeVeen針を用いて全例, 経皮的に穿刺した。31例のうち, 無再発例は20例で局所再発例は7例, 他部位再発例は4例であった。平均治療回数は約1回で, 入院期間の短縮が可能だった。肝癌に対する局所治療としてRFAは有用であった。

## 21. 当院における肝細胞癌に対するラジオ波焼灼療法の現況

瀬座勝志, 阿部径和, 黒澤俊介  
 日野眞一, 隆 元英 (済生会習志野)

【目的】肝細胞癌にするラジオ波焼灼療法(RFA)の局所再発率とその寄与因子の検討。【対象】平成12年9月より平成14年6月までにRFAを施行し, 6ヶ月以上経過観察可能であった24例42結節。【成績・結論】RFAによる治療後6ヶ月での局所再発率は19%であり, 3cm3個以下に限定すると10.7%であり, 単発例では6%であった。局所再発率に寄与する因子として, 治療開始時の結節数とAFPで有意差が得られた。また, 腫瘍径, 焼灼面積, 焼灼時間, 腫瘍/焼灼面積比, 生食注入の有無などに有意差は認められなかった。局所再発に関連する因子に関し, 今後の症例の蓄積と検討が必要と考えられた。

## 22. 当院におけるRFAの治療成績—特に治療効果及びTAE併用について—

大野 泉, 篠崎正美, 宮川 薫  
 井上博喜, 奥川英博, 渡辺哲郎  
 菊池保治, 村岡秀樹, 後藤信昭  
 (沼津市立)

今回当院における肝細胞癌に対するRFAの治療成績を治療効果の観点から各機種別に検討した。対象は1999年6月より2002年10月までの3年4ヶ月に実施したRFA症例203例, 焼灼結節数394結節である。

初回治療例81例中3年累積生存率は80%, 2年半無再発生存率は65%であった。特にcool tip症例では短時間に大きな焼灼径を得ることができ, 局所再発も低率であった。RTC症例の検討で, LPTAE併用では, 焼灼径は拡大しないが, GSTAE併用で有意に焼灼径が拡大することが分かった。

## 23. 肝細胞癌に対する短期間照射による重粒子線治療—1週間4回照射法を中心に—

山口和也, 加藤博敏, 宮本忠昭  
 大藤正雄 (放医研・重粒子子医学センター)

肝細胞癌に対する短期間照射(1週間4回または2週間8回)による重粒子線治療成績を検討した。Grade 3以上の高度肝有害反応の発生頻度2%以下, 2年以降の局所制御率87%, 3年累積生存率53%だった。局所限局・初回治療例の3年累積生存率は69%で肝切除に匹敵した。4回照射法に限った検討でも同様の成績だったことから, 重粒子線治療は, 治療期間1週間以内で肝切除に匹敵する治療成績を上げられる低侵襲治療であることが判った。

## 24. stage IV肝細胞癌に対するTS1の治療経験

真田昌彦, 藤原慶一, 小出明範  
 (川鉄千葉)

現在, PEI, TAEなど肝癌局所治療は確立されつつある。一方で, 近傍リンパ節, 他臓器転移症例がみられ, その治療法には一定の評価がない。今回, Stage IV肝細胞癌6例にTS1, 80mgを投与し(4週投与2週休薬)奏効率33%, 副作用はgrade 2の貧血のみであった。いずれも外来投与可能で, 肝機能悪化例もみられず, 2例でPS1から0に改善した。TS1は, stage IV肝細胞癌の治療の選択肢の1つになりうる。